

平成 29 年度 学長裁量経費助成事業

人間社会学部 社会福祉学科

第 1 回ふくし作品コンテスト

私が目指すソーシャルワーカー／ケアワーカー



作品集



Always with humanity, always from the heart.

目 次

個人の部（五十音順）

I. R.（学部 2 年）	1
I. S.（学部 3 年）	2
I. D.（学部 1 年）【第 4 位（同点同位）】	3
E. K.（学部 2 年）	4
K. K.（学部 1 年）【第 1 位】	5
K. B.（学部 2 年）【第 2 位】	6
K. R.（学部 1 年）	7
N. H. 作品①（学部 1 年）【第 3 位】	8
N. H. 作品②（学部 1 年）	9
H. M.（学部 2 年）	10
M. M.（学部 1 年）	14
M. M.（修士 1 年）【第 4 位（同点同位）】	17
M. N.（学部 1 年）	18
Y. C.（学部 3 年）	19

ペアの部（五十音順）

O. S.（学部 4 年）と T. H.（学部 3 年）【第 1 位】	20
S. R.（学部 1 年）と F. K.（学部 1 年）【第 2 位】	22

私が思い描くソーシャルワーカー

私が思い描くソーシャルワーカーは、「ヒトの喜怒哀楽が理解できるかつ柔軟な人」である。ネット社会になり、皆スマートフォンやタブレットを持ち歩き会社でもほとんどがメールでのやり取りで取引をする。SNSの発達で遠くにいる友人ともすぐに繋がる事も出来る。大都会に出向かなくても知識人の考えや発言に触れることが出来る。非常に簡単になった。しかし物事は良いことしか生まないわけではない。少年犯罪の発生件数は戦後最小と各段に減ってはいるものの、不登校や対人障害を抱える人が増えている。大人になっても引きこもりが続いているのも珍しくない。こういう時、多くの人間が「やる気の問題だ!」とか「根性が足りん!」とか「意志が弱いからこんなことになるんだ」などといった精神論や根性論や感情論で済ます大人が非常に多い。一昔だったらそれで済んだかもしれないが、人間の医学や心理学や行動論が発達している中、根性論などで済ませたら取り返しのつかない事になる。薬物乱用問題とか不登校問題がそうではないだろうか。心が弱い人は絶対にいるし第一に依存症は脳の病気である。そういった人がいるという事実を否定して「意志が弱いから薬物に手を出すんだ」とか「学校に行きたくないとか甘ったれてる」とか「これだからゆとり世代はだめだ」とか勉強した側から見たら無知も甚だしい。

残念ながら、そういったステレオタイプをもつ人はネット社会に馴染めないアナログ世代に多いと思う。新聞やテレビが嘘を言わないと思って言っていることを丸々信じる人・自分の経験則と親からの教えしか信じない人・融通が利かなくて決めた事にずっと固執する人、そういった人が福祉の専門職になれるかと言ったら無理ではないだろうか。福祉の現場ではいろんな人と接すると思う。一つのパターンであればマニュアルみたいのを作成すれば誰でもソーシャルワーカーとして活動できるとおもうが、そうはいかない。年々ネット社会で且つグローバル化するにつれて今までの常識が全く通じなくなりつつある。そうした中でも柔軟な考えを持ち、人の叫びやSOSにいち早く気づいて苦しんでいる人に手を差し伸ばせる人に成ればいいなと思う。

「私が目指すソーシャルワーカー」

私が目指すソーシャルワーカーは、人を笑顔にし、心から寄り添えられるソーシャルワーカーです。私は元々、管理栄養士を目指して大学に進学しました。人の為にできる仕事はと考えたとき「食」で幸せにしたいと思いました。しかし、勉強していくうちに苦手な分野が多く成績が追い付かず、この分野が私に合っているのか、将来は管理栄養士として私が人の役に立つことができるのか不安や疑問を感じ始めました。そして、ある時「社会福祉士」になってみたいというきっかけがありました。私の周りには、高齢者が多く社会保険制度や年金制度を利用している人達があります。その人達を陰ながら支えている人達に目がいききました。その人達はソーシャルワーカーと呼ばれており、高齢者や障害者などに制度を利用してもらい生活しやすい環境を提供したり、その人と一緒に悩みを解決していく姿にこれだと心をうたれました。私が人の為にできる仕事はこれだと近いものを感じました。ソーシャルワーカーは利用者に直接話を聞き、一緒に解決していき心に寄り添う姿がとても素敵でした。

3年生になり、社会福祉学科に移り勉強し始めました。社会福祉学科の勉強は身近なことをより詳しく勉強するため、自分のためにもなるし家族のためにもなる授業が多く学んでいて楽しさを感じ、とてもやりがいを感じました。社会福祉学科の勉強を受講しながら、人に寄り添えられる技術を学び利用者の心を開ける人になりたいと思いました。

将来は、社会福祉士の資格を取ったら生活保護や成年後見人などの仕事につきたいと考えています。今の社会では生活保護を受ける人は恥ずかしいや、差別を強いられることが少なくない世の中だと感じました。生活保護を受けることは、恥ずかしいことではなくその人の最低限の生活を守るためにあると広げていきたいのです。私も小学生の頃はシングルマザーだったため、社会制度を利用しながら生活してきました。社会制度を知らなければ生活はもっと大変だったかもしれません。社会福祉士になり、社会制度を広め人々の生活を充実し心から寄り添えられる社会福祉士を目指します。

I.D. (学部1年)【個人の部・第4位(同点同位)】

私は社会福祉士の資格を持った警察官になりたい。

ここで、私は警察官も認知症の知識を持つべきではないかと思う。

近年、認知症患者が関わる事件が増えている。

警察官と認知症患者、なんのかわりもないように見えるが、実は非常に大きなつながりがあり、認知症患者がこれから社会で生きていくためには必要なことではないか考える。

認知症の患者は、症状がすすむと「徘徊」をすることがあり、家族がみていないところで勝手に家を出ていき、迷子になってしまうということがある。

最近是这样いったケースを想定して、服に住所や名前を縫い付けているひともいるが、いつもその対応ができるとは限らない。

ニュースをみていると、最近では認知症患者が外で迷子になってしまうこともあるし、また迷子になって警察に保護されるケースもある。

しかし、認知症患者の対応はその対応方法を知っている人でなければ難しいために、認知症患者の保護や帰る場所を見つけることが難しくなってしまうことがある。

そこで、警察官がきちんと認知症患者について学び、対応をすることができるようになればいいと思う。

これは、認知症患者が増加すると言われている日本では画期的なものになるのではないか。

警察官がきちんと対応することで、助かる認知症患者は本当にたくさんいるはずだ。今の日本では、認知症患者に対する理解を深めていくことが必要不可欠となるため、こういった取り組みが広まってほしい。

この取り組みは警察だけでなく一般市民にも浸透すべきだと思う。

少子高齢化が進む中、凶悪犯罪だけに目を向けるのではなく高齢者にも目を向けていくべきだ。

私は今まで漠然と警察官になりたいと思っていただけだったが、福祉の勉強をしていくうちに現代社会の問題の一つである高齢化に警察官はどう対処していけばいいのか疑問に思った。

まずは自分がしっかり勉強し、社会福祉士の資格を持った上で警察官になり、警察組織の中に福祉のことを浸透させるのが私の夢だ。

私が目指すソーシャルワーカー

私はソーシャルワーカーになろうとは考えていない。なぜならばソーシャルワーカーは専門職でありながら専門の範囲が幅広く、何がその職の強みであり、具体的にはどのような仕事を行い、どんな専門性があるのか等が不明瞭だからである。

日本における代表的な専門職といえば「医師」、「弁護士」「公認会計士」といったイメージが世間一般では強いと私は考える。これらの職業はこの資格を持ち合わせていないと実行できない行為が多数存在しており、いわゆる「プロフェッショナル」と呼ばれる人々である。また、この職についていない人でも、この専門職の人々がどのような場所に勤務しており何をしている人という説明を大雑把には理解していると考え。それはやはりこの専門職がある一つのことについての「プロフェッショナル」であり、強みを周りの環境も理解しているからである。だが、ソーシャルワーカーにはそれがないように私は考える。ソーシャルワーク定義として、「ソーシャルワーク専門職は人間の福利の増進を目指して、社会の変革を進め、人間関係による問題解決を図り、人々のエンパワーメントと解放を促していく。ソーシャルワークは、人びとの行動と社会システムに関する理念を利用して、人びとがその環境と相互に影響しあう接点に介入する。人権と社会主義の原理は、ソーシャルワークの拠り所とする基盤である。」と定義されている。だがしかし、社会を変革し、人びとがよりよく生きるという専門性が目的としては膨大すぎるためにほかの専門職とは異なって「プロフェッショナル」としては成立していない上に、世間一般にソーシャルワーカーとはどのような人であるか、どこで勤務しているか等という問いを投げかけるととても抽象的な回答しか得られないように考える。そのためにソーシャルワーカーは他の専門職と比較しても世にその存在が浸透していないのではないかと考える。専門性が世に浸透していない職を専門職とは言えないと考える。専門職という存在になるにはやはり他とは違う差異が必用不可欠である。

だから私はソーシャルワーカーになろうとは考えない。なろうと目標に考えるのは「福祉だけが専門としないソーシャルワーカー」である。専門として持っている引き出しが福祉だけの存在なら従来のソーシャルワーカーと変化はない。専門とする引き出しを福祉とは別に持つことで相乗効果が生まれ、従来とは異なったワークが可能になってくると考える。1つの物事を複合的な視点から捉えることのできる「プロフェッショナル」な存在になり、他の専門職とも差異を明らかにすることができる。よって私は福祉という概念にとらわれないソーシャルワーカーになりたいと考える。

K. K. (学部 1 年) 【個人の部・第 1 位】

「私が目指すソーシャルワーカー」

社会との共存生活の中で障がいや病気が原因で毎日の生活にも問題を抱え誰かに聞いてもらいたい、誰か支援の言葉をかけてくれないか等困難にぶつかっている方が身近にいるのではないかと思います。

このテーマを選択した理由の一つが、これまで医療に携わっていたことからの延長線上にもっと勉強したいとの気持ちが福祉への学びのきっかけとなりました。一人一人の患者さんの後ろ姿を見ているとこれまでの生きざまやこれまでに至る問題、あるいは高い壁で先に進めず悲鳴をあげているかのように思えました。私の勝手な想像かもしれませんが人生の縮図を見ているようで私の脳裏に焼き付いています。どうにかして糸をほどいてあげたい、自立のチャンスはないのかと難問ながらもお手伝いをしたいと思います。その思いから問題を解決していく専門職になり、入・退院の支援や生活支援・活動・日常生活の訓練・社会での行事参加・訪問による相談・サービスの提供、高齢者・障害者・児童虐待などの幅広い分野に学んだ全てを活かして支援したいと思います。まず地方でおこっている福祉に関する 2 つの事例をあげてみました。福岡市で 16 年度子供の虐待件数は 1,387 件と市子ども総合相談センターや各区の保健福祉センターが相談を受け虐待と判断した件数で過去最多だとのこと。

次に刑務所にいる認知症傾向のある受刑者の 6 割超が、出所後も福祉的支援を受けず犯罪を繰り返す人がいることです。(厚生労働省の検討委員会の調査) 貧しく孤独で認知症傾向がある人たちが罪を犯す「負の連鎖」をどう断ち切るか、刑務所の出所者のうち高齢者や障害者であったりして帰住先がない人を福祉的支援につなぐ「特別調整」という制度があり、社会復帰後どのように支援をしたらよいか検討中との記事がありました。

認知症傾向がある 60 歳以上の受刑者 72 人について追加調査したところ、出所していた 44 人中、28 人(63.6%)は福祉サービスを受けておらず、うち 5 人(11%)が再び窃盗などの罪を犯している再犯です。

一方福祉サービスを受けた人は 16 人(36%)で再犯者はいなかったとし 28 人がサービスを受けなかった理由に「本人が希望しなかった」「意思疎通が困難で同意が得られなかった」「帰住先があった」「福祉について理解できなかった」などがあげられています。

次は我が長崎県の福祉・在宅医療について関心を持ちました。NPO 長崎在宅 Dr ネットというサイトの情報ですが、坂の町長崎の斜面地の大半は車も入らず高齢者・障害者の外出支援など生活支援に医療・保健・看護・福祉など大変なご苦勞をされている事例を紹介させていただきます。

地域の人々が助け合い住み慣れたところで安心して暮らしたいということで専門職が連携して活動を行っていて、在宅医療で都道府県別自宅死率(2010 年 人口動態調査)によると全国平均 12.6%、長崎は 9.0%で 41 位(全国 47 県中)です。病院や施設での死亡率がまだ高いとの結果が出ています。

人口 10 万人当たり診療所数(10 大都市・中核市)を見てみると全国平均 78.0 で長崎は 130.8 で全国第 3 位です。

一般病床数も全国 11 位と多く、離島の数の影響もあるのではと考えられます。

以上、未熟な内容で恐縮でした。

[添付資料は省略]

—私が目指すソーシャルワーカー（精神保健福祉士）—

戦後 70 年、日本はまぶしい経済発展とともに、より幸福な生き方を志向する国になっている。それにつれ、福祉の意味も生活困窮者の最低限度の生活の支援(welfare)から、QOL を保障する支援(well-being)に移り変わっている。「QOL の保障」は国が国民の高い生活の質を保障することを言うが、それは日本が身体的にも精神的にも健康な生き方を奨励することを意味する。日本は国民の身体的・精神的健康を保つため、福祉専門職を国家資格として認め、専門性やサービスの質を向上するための法律を制定するなど制度的に様々な工夫をしている。そのうち、精神保健と関連して、1997 年、精神保健福祉士法が制定され、精神保健福祉士（以下 PSW）が国から認められる資格となった。PSW は制度的位置づけられた専門職となり、社会の様々なところで、国民の精神保健の増進や保持ため活躍している。

PSW の主な舞台は医療機関で、約 60%の PSW が病院や社会復帰施設などの機関に就き、精神障害者の社会復帰を支援している¹⁾。これをカプランの精神予防医学の観点から照らしてみよう。医療機関で患者が自ら生活問題を解決する力を引き出し、その人なりの自立した生活を暮らせるよう支援するのは、早期に適切な治療を行うことで慢性化を防ぐことや治療を受けた患者の社会復帰を支援し、再発を防ぐことは 2・3 次予防としてとらえることができる。そして、残りの約 40%はその他の機関で 1・2・3 次予防を同時に行う活動をしているといえよう。

それは日本が精神保健の保障において、精神予防医学の 2 次予防・3 次予防にあたる支援は充実していることを意味するが、1 次予防としての支援が乏しいのではないかと思われる。1 次予防の確保は精神健康に有害な要因を減少させ、啓発教育を通して、精神障害の予防するのである。1 次予防は 2・3 次予防より優先すべきであり、それは健康精神を脅かす要素を食い止めることから始めるべきだと思う。それで、私は 1 次予防として、PSW によるメディアの統制が必要があると思ひ、それが私が目指すソーシャルワーカーである。

なぜ、PSW によるメディアの統制が必要なのか。それはテレビがライフスタイルに及ぼす影響を始め、そのライフスタイルが精神の健康を脅かしてしまう恐れがあるからである。例えば、イギリスのある健康団体の調査によると、イギリスの 11 歳の女の子の約 5 割は外見に悩みがあり、それを解決するために必要な努力はダイエットであるという統計結果がある。専門家は TV 宣伝や番組などによる影響やそれに漏出している時間と関係が深いと分析している。イギリス人のテレビ視聴時間は平均 4 時間で²⁾、学童期の特徴を踏まえて考えてみると、映像による体験から与えられた課題が外見になってしまった結果ではないかと思う。これはメンタルヘルス上、決して望ましい現象ではない。外見主義を生み出すだけでなく、低い自己肯定感の形成とともにうつ病や対人恐怖症・引きこもり、しいては自殺までつながりうる。

自分なりに努力して…



『スクールソーシャルワーカーになって、様々な悩みを持つ子どもたちの力になりたい。そして、元気や笑顔を与えられる人になりたい』という夢があります。その夢を叶えるために大学に進学することを決めました。

私は、高校生の時、青少年赤十字海外派遣事業でベトナム社会主義共和国に行き、環境や家庭のこと、日本との違いなど、多くのことを学ぶことができました。

活動の中で1番印象に残っているのは、児童院・孤児院訪問です。耳が聞こえない子、親がいない子、枯葉剤の影響で手足が奇形している子がいました。人身売買から連れ戻された赤ちゃんもいました。

どうして何の罪もない子どもたちがこのような目にあわなければならないのでしょうか。

子どもたちは、私たちを笑顔で迎えてくれました。手話を使って会話をしたり、歌をうたってくれました。なにより、あのキラキラと輝いた目が忘れられません。

障がいがあることが大変、暗い子が多いのかと思っていましたが、その目を見てそんなことはないと感じました。一人ひとり、夢や目標を持っていることを知り、何か私にできることはないのかと思いました。

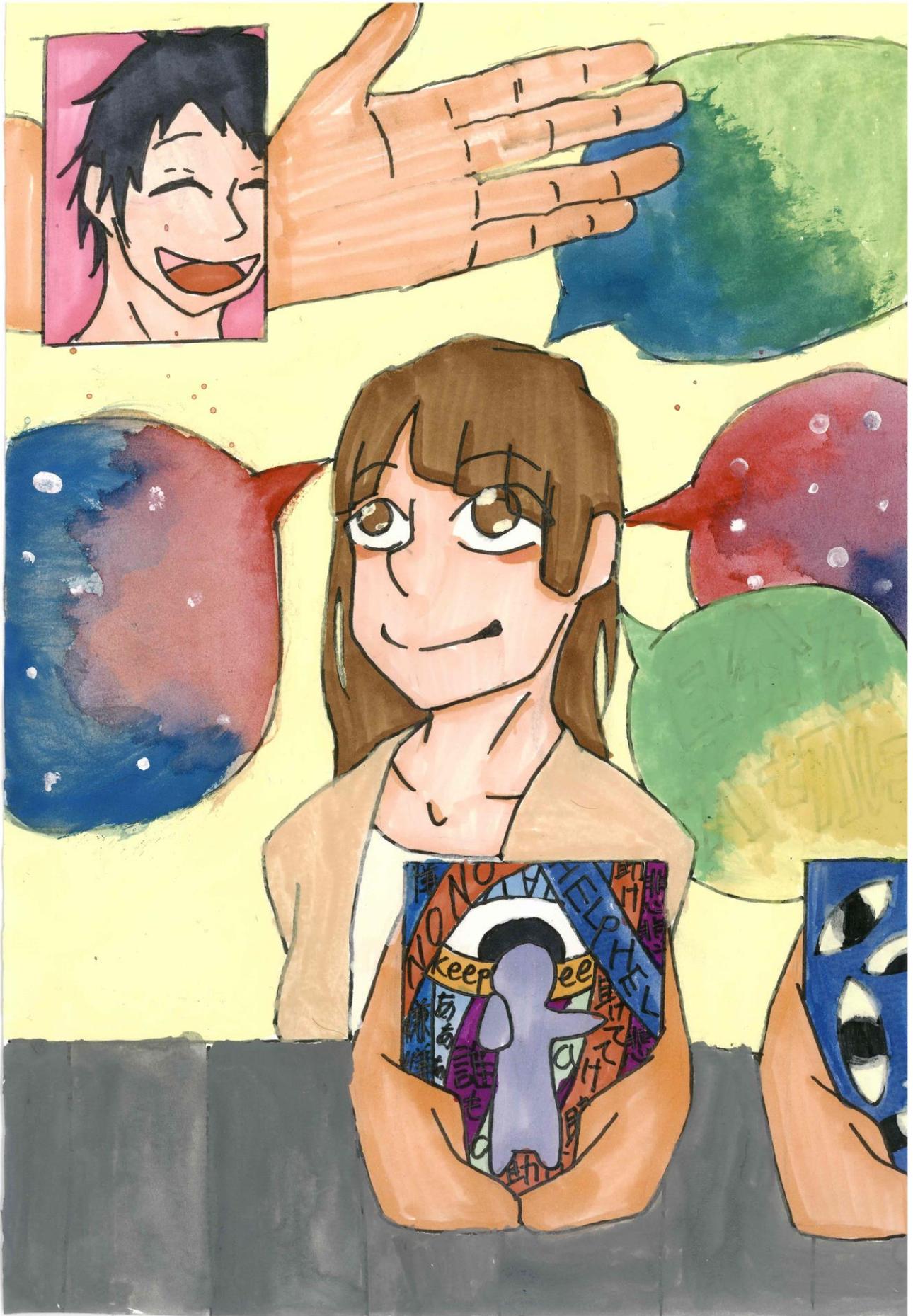
日本に帰り、新聞やニュースを見て、いじめや虐待などの記事を見ました。私に今、なにができるかはわかりませんが、日本で子どもの支援ができるようになりたいと思いました。

まだまだ他にも悩んでいたたり、困っている子どもがいるはずです。周りには何も言わずに誰かが気づいてくれるのを待っている子供がいるはずです。私が全員の力にはなれないかもしれないけれど、精一杯のことをしたいと思っています。

私自身、悩んでいることがあったとき、助けてくれる人がいました。何かがきっかけで悩みが出てきたとき、誰かが手を差し伸べてくれるだけで少しずつでも頑張れるのではないかと思います。

私は、頑張るためのきっかけになりたいです。最初からうまくいくことはないと思いますが、元気で笑顔を忘れずに、自分なりに力になれるように努力し、みんなが笑顔になれるようにしたいと思います。





「私が目指すケアワーカー」

私は、将来介護福祉士になりたいと考えている。介護福祉士は、英語でケアワーカーとも呼ばれている仕事である。

私が目指すケアワーカー、それは思いやりがあり、一人一人に合った介護が行えるケアワーカーである。

ともすれば、ケアワーカーの仕事を汚いと思う人は、世の中には多いかもしれないが、

私はそうは思わない。確かに排泄物を取り扱う介護にいたっては、汚いかもしれないが、ケアワークの仕事内容全てが、汚いわけではないと思う。

最近の講義で、介護者は、被介護者の現在の状態だけでなく、その人が今まで生きてきた人生観についても触れることが大切であると学んだ。なぜなら、高齢者全員が、高齢者である以前に、私たちの3倍や4倍以上生きてきている先輩たちだからである。私たち大学生

が皆違うように、高齢者も一人一人違う人間
だということを知り、だからこそ、目の前の
被介護者の人生についても観ていく必要があ
るのだと感じた。
つまり、私は、入浴や排泄や食事、調理や
掃除に洗濯、買い物など、毎日の全ての生活
支援は、その人の人生を支えることになるの
だと感じた。また、介護で事故を起こしてし
まえば、その人の人生を壊すことになると思
った。

だから、その人の人生を支えるには、その
人に合った介護が大切だと思った。今日、根
強く言われている「自立支援」についてもそ
うで、その人が、最後まで人間として、その
人らしく生きていけられるようにする支援だ
と思う。

このように考えた時、ケアワーカーの仕事
内容は全然汚くない。けれどこころが、被介護
者の一人一人の人間性を尊重出来る、とても
やりがいのある仕事だと思う。

介護の現場で使われるコミュニケーションもそうである。介護をするうえで必要なコミュニケーション技術は、言葉巧みに話すという自分本位の会話力というより、相手の話をしっかりと聴くための「傾聴」や「受容」の共感といった技術だと学んだ。

これらの技術は、相手の気持ちを尊重し、寄り添えることの出来る支援だと感じた。また、相手を思いやるための本当のコミュニケーション技術だと感じた。

つまり、介護には、思いやりが必要不可欠であり、まずは、介護技術の前に相手を思いやるコミュニケーション技術を磨くことが大事だと思った。

結論としては、だから、私は思いやりがあり、一人一人に合った介護が行えるケアワーカーを目指している。

現在、ケアワーカーを目指しているが、私は不器用なため苦勞することも多い。しかし、人一倍努力して、頑張りたい。

また、色々な経験を積むなかで、たくさん失敗をして、たくさん恥ずかしい思いをしながらも、その分、弱い部分を含めて、たくさんの人を好きになっていきたいと思う。

私が目指すソーシャルワーク

私の目指すソーシャルワークは地域住民が繋がりに合いみんなが楽しく暮らして自分らしく生きられる町づくりをする事です。近年では児童に対する問題や高齢者の問題があります。児童に対する問題では親からの虐待や不登校と言った問題があげられます。その問題は全国どこにでもある事でソーシャルワークだけでは抑えきれない問題だと思います。

そこで地域住民で繋がりを強くすれば絶対止めることができると思っています。そしてソーシャルワークはその地域での繋がりをどのように強くしていけばいいかを考えていく必要があると思います。私なら月一で地域での行事を計画したいなと思いました。しかし月一だと忙しくて参加できない人もいるでしょう。しかし朝のラジオ体操を地域行事加えれば三分くらいでも地域の方々と触れ合う事ができます。このような事をしていけばみんながお

互いも分かり合える地域になつていけると思
います。そうする事で児童の虐待や不登校を
解決できると思いました。そして高齢者の問
題では近年では日本は超高齢化社会を迎えて
います。高齢者の問題としては認知症や知的
障がい精神障がいと言った問題があげられま
す。そう言った高齢者達は毎日不安な生活を
送っていると思います。そのような高齢者達
の為に不安なく健やかな生活を送れる町づ
くりをしていく必要があると思います。そう

言った面でも地域の繋がりは大切だと思いま
す。その為にも常に地域でコミュニケーション
を取り合う事が大事だと思います。そして
近年ではもう一つ高齢者の問題があります。
それは孤独死です。それは高齢者の方が一人
で暮らしていく事が少なくなったからだと思
います。そのような問題でも地域での繋がりが
必要になつてきます。一人一人が互いに
大丈夫だよ。と言った地域での助け合い
の精神がこのような問題を解決する事で

るではないてしほうか。私が将来ソーシャル
ワーカーになったら地球での行事をもっとバ
クアップしていき年代問わずに世代を超えて
みんな外繋がる事ができる地球をつくって
きたいです。そうすればみんな楽しく自分
らしく生まれる世の中になると思います。
それが私の目指すソーシャルワーカーです。

私の目指すソーシャルワーカー

私の目指すソーシャルワーカーは、「誰もが信頼でき相談してくださる方が心から安心できるようなソーシャルワーカー」だと考えています。

私は現在、社会福祉学専攻の修士課程一年目で、長崎国際大学の人間社会学部社会福祉学科で4年間社会福祉を学ばせていただき、実習にも行かせていただきました。4年間でたくさんの知識が増え、貴重な現場での実践を経験させていただきました。それと同時に多くのボランティアにも参加させていただき、いろいろな方と関わり、つながる機会をいただきました。

国際ソーシャルワーカー連盟(IFSW)の定義では「ソーシャルワーク専門職は、人間の福利(ウェルビーイング)の増進を目指して、社会の変革を進め、人間関係における問題解決を図り、人びとのエンパワメントと解放を促していく。ソーシャルワークは、人間の行動と社会システムに関する理論を利用して、人びとがその環境と相互に影響し合う接点に介入する。人権と社会正義の原理はソーシャルワークの拠り所とする基盤である。」とされており、この中の「人びとのエンパワメントと解放を促していく」という部分と「人間の行動と社会システムに関する理論を利用して、人びとがその環境と相互に影響し合う接点に介入」という部分に着眼し、ソーシャルワーカーにとってなにが必要であるかを、今までの多くの機会の中でたくさんの社会福祉士と精神保健福祉士の方々を見てきて、すべての方々が利用者、患者、地域住民など様々な人から信頼されていて、頼りにされている存在なのだと感じてきました。

福祉を学ぶ中でラポール形成が基本であるのはもちろんですが、それが一番難しいことでもあると考えています。

私が見てきたソーシャルワーカーの方々は周りからひっきりなしに相談を受けて〇〇さんに聞いたら大丈夫というように本当に信頼されていました。それは単に知識が豊富な社会福祉士という訳ではなく、知識が豊富でかつ、接しやすく、一所懸命な人だから。といった印象だと感じてきました。

また、そこで私はIFSWのソーシャルワーク定義にもあるエンパワメントの視点から特に意思表示が難しい方も多い障害者支援において、当事者のニーズと家族のニーズを聞き取ることが大切であり、それを言語化することが必要だと考えました。そのためにラポール形成が必須になると思います。

私がそこで改めてソーシャルワーカーに必要なと感じたのは「豊富な専門的知識と技術」、「信頼につながる誠実さ」、「多くの繋がり」の3つです。

この3つのことを満たせば満たすほどに、「誰もが信頼でき相談してくださる方が心から安心できるようなソーシャルワーカー」というものに近づくのではないかと考えています。

それは私が修士課程に進学できたのも、長崎国際大学の教職員の方々を信頼させていただいているからであり、ソーシャルワーカーとしてどのような職についても、目指せると思っています。

私は現在、修士課程において、高次脳機能障害者の当事者及び家族への支援を探求し、当事者や家族の心の声(ニーズ)が通る社会であるのかといった研究をしています。

だからこそ私は、社会福祉士と精神保健福祉士の資格取得を目指しており、卒業後にどのような形でソーシャルワーカーに関わる業務をしているかはわかりませんが、これからも、「誰もが信頼でき相談してくださる方が心から安心できるようなソーシャルワーカー」を目指します。

会うだけで元気を与えることができ、困った時には私を頼ってください、相談して良かったと感じていただける関係性を多く築き上げ、専門職としてパワフルで人間味あふれるソーシャルワーカーになりたいです。



題：手とてこり

私は個性を互いに認め合える社会
をつくるソーシャルワーカーを目指しています。
「個性」を3人の「手」で表現し、
私がこれからも持ちつづけた「優しさ」
や「正義」をフィルムカメラ独特の雰囲気
で表現しました。

「私が目指すソーシャルワーカー」

私が目指しているソーシャルワーカー像は、医療ソーシャルワーカー(MSW)です。私は約一年半、健康栄養学科で栄養学を学んでいました。諸事情により社会福祉学科に転学科することになりました。初めては、福祉に関するのは何一つ知らないことからスタートしました。福祉に関する授業を受講するようになって私の中にあった福祉に関する思い・イメージとは全く違いとても興味深く幅広い分野だと感じました。

私がなぜ医療ソーシャルワーカー(MSW)を目指そうと思ったきっかけは、医療機関に勤めたいという思いからでした。もともと管理栄養士になって病院で働きたいという希望があったので、医療分野には興味がありました。自分が考えて作ったメニュー・料理で患者様を笑顔にしてあげたいと思っていたので独学もしていました。社会福祉学科に転学科してきてソーシャルワーカーがどのような仕事を行っているのかなどを学んでいるうちに医療機関でも活躍できることを知りそこで医療ソーシャルワーカー(MSW)に興味を持ち始めました。

よく講義中でのDVDをみてソーシャルワーカーの働きをみて自分の将来像をイメージすることができました。その中でも、「助けを求めたいのに求められない、制度の谷間、虐待」などのことを聞き、私もソーシャルワーカーとして手を差し伸べてあげたい、不安そうにしている表情から笑顔を取り戻したいと思うようになりました。医療ソーシャルワーカー(MSW)は、自殺未遂や薬物多量摂取(オーバードース)などの問題を抱えている患者様を社会福祉の立場から心理的・社会的な問題の解決・調整を援助し、社会復帰の促進を図っています。不安に感じている気持ちを少しでも軽くしてあげたいと思います。また、私は健康栄養学科で学んだ栄養学を活かした支援をしたいと考えています。解剖生理学実習では体の構造を知るとともに命のありがたみを学びました。医療機関で働く上では医療保険など地域連携を図る取り組みも大事だが患者様にあった適切な支援・制度を提供していきたいと思います。

「私が目指すソーシャルワーカー」

私たちが目指すソーシャルワーカーは、多くの人々を笑顔にすることができるソーシャルワーカーです。この絵は、福祉をハートの花として考えています。人は心を支え合うことで幸せになれると思ったのでハートの花にしました。花が元気に育つためには水を与えることが一番大切なことです。何らかの助けを必要としている人に手を差し伸べ、その人のニーズに適した支援を提供することを水に例え、福祉の花をキラキラと美しく咲けるようにSWがそれぞれに適した水をあげることで、問題解決に繋がるアプローチをしていくことを表現しています。

私たちは福祉を色で例えると虹色だと考えます。それぞれのニーズに合わせた支援をする際はフォーマル、インフォーマルなサービス、地域や様々な機関、多職種と連携しながら支援を行います。このように多くの人々で支えあうのが福祉だと考えるので、ハートの花を虹色で表現しました。

私たちが水を与えることによって、大きく花は成長し、笑顔が溢れてキラキラと光ってほしいという思いを込めてこの絵を描きました。



「私が目指すケアワーカー像」

私が目指すケアワーカーとは、地域に密着し住民や高齢者同士のつながりをつくり、その地域の活性化させネットワークを拡げることの出来尚且つ自分の信念を強くもつ人間です。

私がつながりに注目する理由は、これまで参加したボランティア活動を通して人と人とのつながりの重要性に気付いたからです。私は介護クラスに入るまで、「介護」と聞くと低賃金、過労などマイナスイメージばかり浮かんでしまい、自分に務まるのか不安でした。しかし授業のなかで介護を学び深く学んでいくうちに、「わたしがやらなくては」「少しでも力になりたい」と思うようになりました。

そして、介護について知りボランティア活動に積極的に参加するうちに、介護が楽しいと思うようになっていました。私はこの幸福感を知って欲しくなり、ボランティア活動に友人を誘いました。しかし友人はボランティア活動には参加せず、「したい人だけでいい」「稼げるわけじゃない」と拒否されました。確かにボランティア活動に賃金は発生しませんが、ボランティアの魅力がそこにあるとは考えません。私は自分の考えと友人の考えが異なったときにはじめて価値観の違いというものを実感しました。そこで、介護に対する意識は個人の価値観と知識で形成されていると考えます。

思い出してみると、私は福祉の道を志した高校生ときも周囲の反対は大きかったです。「3K」という言葉があるように、輝かしく誰もが憧れる職業ではないかもしれませんが、それでも、だれもが避けて通る道を堂々と通りたいと思いました。それは、ボランティアで活動している時間だけは何にも囚われずにありのままの自分でいられたこと、身内の高齢者が目に見えて衰弱していくのに自分は何もしてあげられない無力感が私を動かしているからです。介護に対してマイナスイメージを持っている人は、価値観の違いから介護への意識が確立している面が見受けられるので、その「特別」な意識を取り払うことが出来れば、介護へのマイナスイメージを取り払うことができるのでないでしょうか。

しかし、そのようなことが出来るのはプロの専門職だけです。また、よりよい支援を行う上で相談援助の専門性が必要だと考えているので、介護福祉士と社会福祉士を目指しています。私はいまの介護に対する気持ちを大切に、地域介護を支える「スペシャリスト」としてその地域のネットワークづくりと社会開発を行いたいと考えています。そのためには経験を積み様々な情報を知っておかなければなりません。

まずは日常の小さなことへの気づき、できるだけ沢山の情報を知っておくこと、そして何より勉学に励むことが大切です。学生の間はしっかりと学び、転がっている情報を無駄にしないよう積極的に活用していきたいと思います。

担 当 者

代表者 Virág Viktor (講師)

分担者 坂本 雅俊 (教授)
石橋 亜矢 (講師)
金澤 由佳 (講師)
裊 孝承 (助教)

特別協力 野田 健 (講師)